

2022年3月28日

駐日インドネシア共和国大使
特命全権大使 ヘリ・アフマディ閣下
〒160-0004 東京都新宿区四谷四丁目 4-1 四谷国際ビル

カニクイザルの捕獲と研究用輸出・繁殖の禁止を求めます

当会、動物実験の廃止を求める会（JAVA）は、動物と人間が共存共生できる豊かな社会を目指して積極的な活動を展開している日本のNGOです。国連顧問団体をはじめ、世界100以上のNGOと協力関係を持ち、連携を取りながら実践的で幅広い動物保護活動に取り組んでいます。

さてこの度は、貴国におけるカニクイザル（*Macaca fascicularis*）の捕獲と研究用に輸出・繁殖の禁止をお願いしたく、お手紙を差し上げました。

私たちは、同士である Action for Primates の調査によって、貴国における凄惨なカニクイザルの現状が明らかとなり、私どももその惨状を知ることとなりました。

Action for Primates が公開している動画

(https://actionforprimates.org/news_media/News_media_Indonesia_monkey_film.mp4) をご覧いただければ一目瞭然ですが、サルたちは非常に手荒い方法で捕獲され、母ザルと子ザルは無理やり引き離され、棒で殴られ喉をかき切られて殺されたサルもいます。

サルを含め、動物の密猟は貴国のみならず多くの国で起こってしまっていますが、貴国の場合、この捕獲と輸出を国が許可しているということは大きな問題であり、大変遺憾です。

貴国は希少な動物種が豊富で、特にオランウータンをはじめとする霊長類の種類の多さは世界有数の国であることを貴国は十分認識すると共に、それを誇りに思い、霊長類の保護に全力をあげるべきです。

動物福祉の意識の世界的な高まりに伴って、動物を用いた研究に対する反対の声も高まってきており、特に知能が高く、社会性も豊かな霊長類の研究利用に対しては厳しい批判が向けられるようになりました。

日本は、恥ずべきことに動物福祉が遅れている国ですが、それでもチンパンジーの侵襲的実験利用は廃止となりました。また、日本にはカニクイザルと同じマカク属であるニホンザルが生息しており、貴国と同様に農作物への被害、住民との軋轢といった問題が生じており、多くのニホンザルが駆除されている現状があります。しかし、野生個体を捕獲し、研究利用することは無用な駆除を助長し、野生のニホンザルの群が消失や攪乱してしまいかねないという理由から認められていません。

野生のカニクイザルの捕獲は、感染症の観点からも非常に問題があると考えます。ご存知のようにヒトとサルは近縁であることから、赤痢やBウイルス病など多くの共通感染症があります。貴国でのカニクイザルの捕獲を行っている人々が感染症や寄生虫の有無もわからない野生

のサルを捕獲する作業の中で、それらが捕獲者に感染し、それがまた、その捕獲者の家族などに広まるリスクもあります。感染症の恐ろしさは、まさに今、COVID-19 の脅威にさらされている私たちは身をもって感じているところであり、国民の健康と安全を守る側面からも、このカニクイザルの捕獲は禁止すべきです。

貴国は世界中から多くの観光客が訪れる人気の国であり、スマトラトラ、スマトラサイ、オランウータン、ボルネオゾウ、極楽鳥、ビッグミーメザネザル、クロザルロサル等々、たくさんの珍しい動物たちに出会えるということも、観光の目玉として、貴国観光省はアピールされています。観光客たちは、インドネシアは、動物たちを国の宝として手厚く保護している国と思っているわけで、まさかカニクイザルたちがあのように虐待・虐殺されているとは、誰が想像するでしょう。

しかし、その惨状は Action for Primates や彼らに協力する多くの市民や動物保護団体によって広められています。当会も動物のために活動する組織の使命として、日本の人たちにこの実態を伝えなければなりません。

動物虐待国というレッテルを貼られ貴国の評判を落とすことになってしまい、ひいては観光への悪影響を及ぼすことにもなりかねません。それらを防ぐためにも、貴国はただちにカニクイザルの捕獲、研究用の輸出・繁殖を禁じるご英断を下されますよう、願ひ申し上げます。

ご多用中のところ誠に恐縮ではございますが、上記の要望につきまして、2022年5月31日までに書面にてご回答をいただきたくお願い申し上げます。

なお、この要望書を含めた関連資料は、関係省庁、関係団体、マスメディア等に公開する場合がありますことを予めご承知おきください。

敬具

特定非営利活動法人動物実験の廃止を求める会（JAVA）

理事長 長谷川裕一